

お伽草子『調度歌合』管見

——注釈作業を通して——

『調度歌合』は、十五世紀に制作されたとされる、お伽草子の異類物の一作品である。本作品の代表的伝本である『群書類従』雑部に収められた本（以下、群書類従本）の奥書に、「右一卷、三条実隆入道逍遙院堯空ノ真跡也、臨于此卷書写畢、公頼」とあることから、作者に三条西実隆が擬せられてきた。本稿では、この『調度歌合』の三条西実隆作者説について再検証しながら、これまで全く論じられてこなかった本作品の物語としての特質について考察してみたい。

物語の内容について記す。ある年の三月の末のころのこと、帝が高野山に行幸されるという噂が世間に広まり、都中が騒然とする中、主人公がその一行の行列を見物に行くところから始まる。主人公は、疲労困憊して自宅に帰ってくるのとたちどころに眠りについてしまう。しばらくして、ふとした物音で目覚めてみると、自宅に置かれている調度類が言葉をしゃべり、歌合を繰り広げている場面を目撃する。登場する調度類は順に、灯台・炭櫃・台の竿（衣紋かけ）・屏風・高坏・茶臼・机・脇息・銚子・水瓶・碁盤・長持・伏籠・塵取・杉櫃・葛籠・下沓・裏無し・大壺・御樋台の二十種（原文表記のま

ま）である

貴人の屋敷内での家具調度類たちによる歌合という興味深い趣向であるが、現在のところ知られている伝本は、群書類従本のほかに、彰考館本がただ一本存在するのみである。

今回、本作品を論ずるにあたり、彰考館本を直接調査する機会を得たが、彰考館本は、縦二四・七センチ、横一七・六センチで、『十番歌合』『三十番詩哥合』と合綴された、挿絵を伴わない写本である。書写年時は、漢字表記に数多くの訓み仮名が振られているなどの諸要素を考えると、江戸中期を上がることはないと思われる。また、内容に関して、群書類従本と比較校合してみると、文意の不明な箇所や誤脱がまみられ、本文の状態は、群書類従本より悪いと言わざるを得ない。そこで、本稿では、群書類従本を底本として用いながら、必要に応じて、彰考館本を参照することにした。

まず冒頭「弥生の末つかた、高野山の御幸とて、世の中ひびきし」とある「帝」の高野山行幸の叙述であるが、この部分で指摘しておかねばならないことは、三条西実隆自身が、大永四年（一五二

四)に、後柏原天皇に付き従って高野山に参詣しているという事実である。

彼の『高野山仮名記』に「四月の頃、住吉天王寺にまうづべきころざしありて、十九日伏見へまかりて、般舟院にしばらく休み」とあり、また『高野詣真名記』大永四年四月二十二日条に、「廿二日。晴。高野参詣。早朝進発。於路根来迎馬二疋送之」とみえ、大永年間のこの折の参詣が本作のモデルとなっている可能性が想定できる。

物語では、この参詣行列を目撃している場面で主人公が詠む歌が一種付される

世を護る法の聖の故郷は春の錦を立ちきてぞ行く

(世を護る仏法のような優れた帝が治めているこの国は、春のあでやかな風景を織りなして身にまとうように、ありありと榮え続けていくことだなあ)。

この歌は、おおよそ前記のような内容と解せられるが、神宮文庫にのみ蔵せられる三条西実隆作とされる、『道遙院殿三十番歌合』の中の、第五番左の歌に「よをまほる のりのひしりのふるさとは 春の錦をうちきてぞ行く」とみえ、おおむね『調度歌合』の当該歌と一致しており、三条西実隆が本物語の制作に深く関わった可能性は、さらに高まるものと思われる。

(現代語訳)

三月の末の頃のこと、帝が高野山へおでかけになるといふことで、

世間が騒がしくなった。昔のお出ましの時以上に、世の人々を引き付けるに違いないという評判だったので、大変に高貴な方の車に、やっとの思いで乗り込んで拝見したところ、太上天皇を始めとする大臣、公卿、殿上人らの姿は、本当にこの世のものと思われぬ程素晴らしい。さまざまな色をふんだんに凝らしたそのいでたちは、まぶしいばかりの美しさであり、まさにこれこそが、京の都の春の桜のような華やかさといふべきものだと思われた。

わけもなく気持ち昂ぶったのであろうか、井出(京都府綴喜郡井出町)の玉川に住むという蛙の奥ゆかしさが想い合わされた。春を愛でて鳴くその蛙に、目を借りられてしまったためなのか、車から転げ落ちてしまいそうなほど眠たくなり、行列が特におもしろいとは思わなくなり、家に帰り着いて、日頃寝起きしている所で横になった。

お仕え申し上げている主人は、住吉の阿倍野とかいう所まで、帝をお見送り申し上げるということで、家人を皆引き連れてお出かけになられてしまい、三日程してからお帰りになられるという。家の外も内もとても静かであり、私は存分に寝入り込んだ。

その日の夕暮れ時から、次の日の明け方まで、夢さえ見る暇もないほど、ぐっすりと眠って身動きすることもなかったが、なぜであろうか、ふとした拍子で目が覚めてしまった。あれこれと考え巡らすことも、たいそう恐ろしい。他に人がいないはずなのに、わずかな隙間から光が見えた気持ちでしたので、夜が明けたのだらうかと思ひ、遣戸を開けてみたところ、山の端の遠くに有明の白露も

残るほど、ほのかに月の光が射しており、まだ夜が深いことを知らせる鳥の鳴き声もかすかに聞こえてくる。昔から言い慣わしてきたように、春の夜のことなので思わずしんみりとしてしまい、物思いにとらわれてしまった。

そうは言っても、そのようにばかりもしておられず、短夜の春とはいえ、夜明けまでには、まだかなり時間があるような気がしたので、うつらうつらしていると、思いもかけず、不思議な恐ろしいことが起こった。

家中にびつしりと置かれている、様ざまな姿かたちの道具どもが、それぞれに声を挙げてしゃべっているのである。とても珍しい光景なので、耳をそばだててその話を聞いていると、この家の中ではかなり高い身分の方と思われる、「炭櫃」が何事かを話している。

「主人様が留守なので、いつもにもまして退屈です。やはり私たちは普通の人のような調度ではありません。春の夜の退屈な寝覚めのこの時に、歌の会でも始めようではありませんか」と言い出した。すると、この炭櫃の灰のすぐ上にいる「水瓶」が、「それは優美なことですね。他の方々もご意見を聞かせてください」と言う。他の調度たちは「ぜひ、やりましょう」と応じて、歌会を開くことが決定した。

次に、炭櫃の声で、「では、歌題は何にするのがよろしいでしょうか」という問いかけがあった。すると、口先の達者な水瓶が、「各人がそれぞれに、恋の心を題にして詠めば、おもしろいでしよう」と言うと、皆は「それは大変いい」ということになった。多く

の調度たちが騒ぎ合っている声は、たいそう不思議であり、空恐ろしくも感じられた。

早速、調度たちがみな歌を詠み出したので、その数を数えてみると、様々な調度類が多くひしめいてはいたけれど、歌を詠む者はちょうど二十名であった。「それならば、歌合にしましょう」と、水瓶が言い出したところ、「それは、ますます良いことだ」という話になり、「では、読師（歌合などで、詩歌の書かれた懐紙や短冊などを講師の読み上げ順に整理する役）は誰にしましょうか」、「判者は誰がいいでしょうか」などと論じていると、「この件については、衆議判（歌合などで左右に番えた和歌の優劣を、その場の全員の見で判定をすること）でやるのがよいでしょう」ということに決まった。それぞれが良し悪しを決めるにつけて、歌は詠まないけれど、この時と場に適しているということで、硯に置かれた兎の毛の筆が書き留めることとなった。

一番 恋

左 灯火の台（「灯台」）

知らせばや来る宵毎に灯火の明石の浦に燃えわたるとも

私のところにおいでなさるには、その夜（ご）に知らせていた
だきたいものです。たとえ私（灯火）がああ明石の浦を明る
く燃えわたるようにしていても。

右

炭火鉢（「炭櫃」）

埋火の下に焦がるる甲斐もなく塵灰とのみ立つ浮名かな

灰の下の埋火のように、見えないながら恋い焦がれているというのに、その思いが伝わることがなく、ただ塵や灰が立つように世間に噂されているばかりです。

最初の組み合わせは、左方が灯台。右方が炭火鉢です。表面に出さないで、隠れたところ（心の底）で焦がれているという恋の心は、どちらも優雅です。まことに勝敗はつけ難いですが、しきりにのことって第一番目の左歌ということもあり、万葉集の時代の古風な風情（『万葉集』巻三・柿本人麿）を詠み込んだ様子が気高いので、左の勝ちとしましょう。

二番

左 衣紋掛け（衣桁 衣架、掛け竿）（「台の竿」）

みさほにも涙のかかる恋 衣逢はぬ限りは干されやはする

我が身を竿に掛けるようにして操を立てていても、恋しい方にお会いできないと、つらくて涙が掛かってしまいます。こんな事で濡れた衣が乾くことがあるのでしょうか。

右

屏風

妹に恋ひ憂き年月を古屏風 骨もあらはに瘦せなりにけり

あなたに恋い焦がれて、思い悩んで長い年月を過ごして参りました。今ではすっかり骨（骸）もあらわになり、瘦せ衰え

てしまったことです。

左方の歌は、風趣も言葉も、本当に艶やかな美しさが感じられます。ただし、「みさほにも」と詠む「も」の字は、少し余計なように思われます。右の歌は言葉遣いなどは、上品で心ひかれる歌と思われませんが、下の句は、あからさまに過ぎるのではないのでしょうか。そこで、左の歌は少々難点がありますが、全体の様子が美しく整っていますので、また左方の勝ちとしましょう。

三番

左 高杯

恋すてふ我が浮き名のみ高杯に盛りし涙を悔ひて甲斐なき

恋しているという噂が高く聞こえるようになり、この高杯に盛り上がったように溜まった涙は、食い尽くせるものではないように、悔いも甲斐のないことです。

右

茶臼

ひく人の心変はらば同じ世の契りものちやうすく成りなむ

茶臼を挽くとはいいますが、気持ちを引き合う人の心が変わってしまいますと、この世で約束した愛「ぢやう」（＝定め）までも、「うす」（＝薄）くなってしまうのでしょうか。

左方の歌は、「高杯」を巧みに取り込んだ表現は興味あるもの

と感じられますが、右の歌では「茶臼」の名前を隠して、
 「契りも後や薄く成りなん〓契ものちやうす（茶臼）く成りなん」
 としています。たいそう優美に感じられ、右方の茶臼の歌に、誰
 もが心ひかれます。（事物の名前を隠しこんだ形で詠んだ歌を物
 名歌（なづな）（ぶつめいか）という）

四番

左 机

袖（そで）かけて硯（すずり）を慣らし書く文（ふみ）と人に墨（すみ）つくえとも成らなむ

机の端（〓袖）に衣の袖を掛け、硯に親しんで書き上げる手
 紙や、その人には墨が付きます。それと同じ様に、私がお二
 人をいっそう縁付くようにいたしましょう。（墨付く縁（すみづくえ） 〓
 「墨机」）。

右

肘（ひじ）かけ（脇息（けつそく））
 老人の力と成れる甲斐（かひ）もなし 身さへ苦しき恋の道には

高齢の方々の力となれる身の上ではありません。私自身が、
 重く抑えつけられて苦しいような、つらい恋をしていますの
 で。

右方の肘かけの歌は、「老人の力となれる」というだけでは、
 肘かけの心情がはつきりしないように感じられます。左方の机の
 歌で「墨付く」というのは、顔に墨を付けて笑われたあの平仲

（平貞文（たいちのさだま））の例も想起させられて、おもしろく思われます。左
 方の勝ちといたします。

五番

左 銚子

みきとだに人は今さら思はぬを強（じ）めて憂（うれ）しとやなを恨みまし

お会いできたこと（「見き」）を、あなたは今では何とも思わ
 ないので、無理に「つらい」と思ったりすると一層恨みがましい
 気持ちになります。（「見き」に「御酒」を掛ける）

右 水入れ（水瓶（すいびょう））

口にさていつか漏らさむ思ひせく心の水のわきかへる身を
 水瓶の口先は水がこぼれやすいので、いつかは口に出したり
 はしないだろうかと心が締め付けられるほど、あの人への思
 いが心の中で沸き返っています。

左方の銚子の歌は、全体の風趣といい言葉の用い方といい、美
 しく感じられます。右方の水瓶の歌は、初句の五文字ほどは、的
 確な表現と言えますでしょうか。水瓶の心情が少々はつきりしま
 せんので、左方の勝ちとみるべきでしょう。

六番

左 碁盤

目にも今見る心地して乱れ暮のうちも忘れぬ面影は憂し
 夢中になつて碁盤の目を乱れ打つように、あなたに夢中の私は、今も目の前にお会いしている心地がして、面影を少しも忘れることができないのはつらいことです。

右
 箆筒たんす（「長持」）

往らに逢期なければ見しなかもちちの恨みの種とこそなれ
 このまま空しくあなたとの逢瀬がないならば、これまで逢つてきた私たちの仲も、かえつてたくさんの恨みの種となつてしまふことでしょう。

右の箆筒の歌は、特に難は感じられません、左の碁盤の歌の「みる心地して乱れ暮のうちも忘れぬ」と詠んだ言葉遣いには、優美な美しさが感じられますので、やはり左方の勝ちと決めましょう。

七番

左 伏籠ふせご（火鉢や香炉を中に置き、伏せておく竹製、金属製の
 かご）

後朝きみあさの飽かぬ匂におひを形見かたみにて独りふせこの床ぞさびしき
 後朝（男女が一夜を過して別れる朝）に、飽きることなくあの人の香りをよすがとして、独りで臥している寢床は本当に寂しいものですよ。「あく」に「明く（下二段）」「飽く」

を掛ける（）

右
 塵取ちりとり

訪まはれねばうちも払はぬ床ゆへになど塵取ちりとりの名のみ立つらむ
 尋ねる人もいないので、埃を払つてまできれいなにはしない寝所なのですが、どうして世間では、私の「塵取」という名前だけが広く知られてしまうのでしょうか。「うち」に「打ち」「内」を掛ける（）

左方の伏籠の歌は、後朝の別れでの衣の香りに惹かれて独りで臥しているという古歌に倣つており、右方の塵取の歌は、塵を払わない床なのに、塵取という名前が知れ渡っていることを気にしている。それぞれに、たいそう趣き深く感じられますので、引き分けといたします。

八番

左 杉櫃さきびつ（杉製の箱）

三輪山みわやまにすみあるかひは無けれども杉のしるしをなや頼ま
 む

杉の木で知られた三輪山の片隅に住んでいるのは、人が訪れるはずもないのだけれど、それでも三輪明神が恋人に對して目印にせよと詠んだ標しるしの杉ではないけれど、これまでの付き合いをよしみとして待つことにしよう。「すみ」に「住

み「隅」を、「かひ」に「甲斐」（「食器の」匙）を、「杉」に「過ぎ」を掛ける）

右 葛籠

人目のみ繁き深山を分け侘びて行き来休まぬつづら折かな

世間のたくさんの目を避けて、山深く分け入ったものの行き悩んで、行きつ戻りつして心休まらない恋の路は、葛のようにくねくねと曲がったものであることだ。

左方の杉櫃の歌は、「杉櫃のすみある」という歌にかこつけているのは巧みに思われ、右方の葛籠の歌は「しげき深山の青つづら苦しき世をぞ思ひ煩ふ」と詠んだ本歌の心を取り入れ過ぎたように感じられます。しかし、優美にも葛折り（九十九折）を行き悩むのを恋の路に引き合わせたのもさらに興趣があり、左方の「杉のしるし」よりは、「行き来休まぬ青つづら」の表現に尚一層の情趣も感じられます。ここでは、双方の歌に心引かれるものがあります。

九番

左 木靴（「下沓」、下履き）

恨みずやさても難波のあし袋 つぶふしの間も逢はぬつらさを

葦で知られた難波の浦の足袋よ。粒のように小さなわずかな

間でも、お逢いできないつらさを、恨みに思わずにおられましようか。私（＝木靴）とあなた（＝足袋）とは、いつも接しているではありませんか。（「うらみ」に「裏見」「恨み」を、「あし」に「葦」「足」を掛ける。「節」は「葦」の縁語）

右

草履（「裏無し」）

楫を絶え鼻緒切れぬと知らせばや舟さし寄せる浦なしにして

舟で行き来できず、歩くにも鼻緒が切れてしまったとお知らせしたいものですよ。舟で行けたとしても漕ぎ寄せる浦さえないのですから。（「かち」に「楫」「徒歩」、「うら」に「浦」「裏」を掛ける。「鼻緒」は「舟の」端尾（前後）に通じ

左方の木靴の歌は、歌人の伊勢の古歌をふまえており、右方の草履の歌は、裸子内親王の家の宣旨からつくり出された物語（「狭衣物語」巻一）の文句に自らの情感を託しており、両者ともに優美なものと思われまます。左方の歌に「ほんのわずかな間であつても」とあるのは、「踵を返す間もなく」という意味が込められているのが少々大袈裟に過ぎるように思われます。一方、右方の草履の歌で、「鼻緒が切れてしまった」とあるのも、「鼻缺牛（＝鼻網を使うこともできないほどの役立たずの牛）」の有様を想像してしまう心地だと批判する方もいるので、双方を引き分けたい

十番

左 おまる（「大壺」、身分の高い人の使う便器、便壺）
お留守にもとどめ置かるる我が夜坐は名残惜しとの形見成る
らむ

ご主人様がお出掛けの間もそこに置かれて、夜も寝ないで起きています私は、ご主人様が名残り惜しいとしてその形見となつておられるのでしょうか。（夜坐は夜間に行う座禅。座禅堂における所定の場所での正式な座禅。転じて、深夜に所定の場所ですら座つておられること）。

右 御樋台（彫木。おまるを使用する際の足乗せ台）

知り知らぬ匂いぞ留まる 懐の涙の川のうち濯げども

知っていても、知らなくても、おまるの奥部には匂いが付いているように、私の心の奥にはあなたの香りがとどまっており、悲しみの涙で洗っても落とすことができません。（「知り」に「尻」を掛ける）

左のおまる（便壺）の歌は、「名残り惜しとの形見なるらん」とある言葉遣いが、古くからよく用いられているように受けとめられますが、近頃、花見の車から法師に詠みかけた、同じような様子が『今物語』の中にあるのではと申し出た人がいます。

しかしながら、これほど募った思いを他人の口から漏らされたりしたならば、どう応えてよいか分からず、さぞや無念に思うで

しよう。右の御樋台（おまるの足乗せ台）の歌は、ただ一人の心を恋しく思っているのではなくて、見ず知らずの人の匂いを我が身深くに留めているという詠みぶり、傀儡という歌舞の芸人があるという恋愛のことを言っているのだろうか、などと興味を引かれる歌に思えます。どちらが優れているかとなると、判じかねますので、また引き分けといたします。

そうこうしていると、夢なのか現実なのか、どちらとも分からなくなつてしまい、夜も明けたので、この調度たちの声もしなくなつた。周囲の人にこの出来事を語つて聞かせても、誰も真実だとは信じてくれない。では、やはり夢だったのであろうか。とても怪しげなことであつた。本当なのだろうか、おまると御樋台は、壁の向こう側の真ん中の落ち窪んだところに置かれていたが、他の調度たちが歌合を催すことを決めたのを聞いて、自分たちも仲間になろうと望んで、壁越しに申し入れたのであつた。とても不思議極まることと思われた。

鶯も蛙も歌を詠むなれば声なきものの声もありけり

『古今和歌集』の仮名序に、鶯や蛙であつても歌を詠むとあり、話すこともないと思われている調度のようなものであつても、歌を詠んだりすることはあるのだ。

奥書に言わく、右の一卷は三条西実隆入道、遣遙院堯空の真筆

の巻に臨んで書写し終わった。公頼

【注】

井出の河津 井出は京都府南部の地名。木津川に注ぐ玉川の扇状地にある。蛙と山吹で名高い。

目をば借り取りて 慣用句「蛙の目借時」を踏まえる。春暖の、蛙

が鳴きたてる頃の眠気を催す時期をいう。眠気を催すのは、蛙によって目が借りられたためと考えられていた

衆議判

歌合うたあわせなどで、左右に番えた和歌の優劣を、一定の判者が判定せず、左右のに待した全員の意見で判定をすること

灯火の

「灯火の明石大門に入らむ日や漕ぎ別れなむ家のあたり見ず」（『万葉集』卷三 二五四番歌 柿本人麿）

恋すてふ

「恋すてふ我が名はまだき立にけり人知れずこそ思ひそめしか」（『拾遺集』卷十一、六百二十一番歌、壬生忠見）

平仲がためし 『古本説話集』上巻・第十九話のほか、源氏積、異

本紫明抄、河海抄等の注釈書にみえる故事。空泣きをするための小道具として平仲が携帯していた硯瓶

（水差し）の中身を、彼の妻が密かに墨と入れ換えのために平仲の顔や袖が墨で真黒になったという。

心の水のわきかえる身を「思ふとも君は知らじなわきかへり岩漏

る水に色し見えねば」（『源氏物語』胡蝶、柏木の歌）

うちも払わぬ床

「塵のある物と枕はなりにけり何のためにかうちも払はむ」（『和泉式部集』卷二、二百九十二番歌）

三輪山に

「わが庵は三輪の山もと恋しくは訪ひきませ杉立てるかど」（『古今和歌集』卷第十八、雑歌下、九

百八十二番歌、読み人知らず）

繁き深山の青つづら 「人目のみ繁き深山の青つづら苦しき世をも

思ひ侘ぬる」（『後拾遺集』卷十二、六百九十

二番歌、高階章行朝臣女）

楫を絶え

「楫を絶え命も絶ゆと知らせばや涙の海に沈む船人」（『狭衣物語』卷一、飛鳥井姫君の歌）

伊勢がふること

「難波潟短き蘆のふしの間も逢はでこの世を過ぐしてよとや」（『伊勢集』四百二十九番歌）

裸子内親王の家の宣旨つくり出たる物語 『狭衣物語』のこと

今物語

鎌倉時代中期の成立とされる説話集。藤原信実の作とされる。現存の『今物語』所収話に、当該記事はみえない。

鶯も蛙も歌を詠む

「やまと歌は、人の心を種として、万の言の葉とぞ成れりける。世中にある人、事、業、繁きものなれば、心に思ふことを、見るもの、聞くものに付けて、言ひ出せるなり。花に鳴く鶯、水に住む蛙の声を聞けば、生きとし生けるもの、

三条西実隆入道

いづれか歌を詠まざりける」(『古今和歌集』仮名序)

康正元年(一四五五)～天文六年(一五三七)。室町時代の文人。古典研究家。逍遙院堯空はその法名。彼の日記『実隆公記』は、当時の文芸・社会の様相を知る上で、重要な資料である。

公頼

三条公頼。明応四年(一四九五)～天文二十年(二五五二)。室町時代の公卿。藤原北家の流れを汲む閑院流嫡流三条家の当主で、三条実香の子。官位は従一位左大臣で、後竜翔院左大臣とよばれた。

(みうら・おくと 大学院博士後期課程在学)